

知的障害者と健常者の友達関係†

渋谷 真二*

秋田大学大学院

今野 和夫**

秋田大学教育文化学部

友達関係は人生においてなくてはならないものだが、障害のある人にとっては、ノーマライゼーションの実現ということにおいて障害のない人との友達関係も欠かせない。この重要なテーマについての試行的・探索的な本研究では、作業所に福祉就労する知的障害者(41名、うち31名が20歳台)の保護者に対して質問紙調査を実施した。その結果、彼らには友達が少なく、特に障害のない友達をもっている人は僅少であること、保護者たちは子どもが就学前や学童期の頃は障害のない友達ができるようにといろいろ取り組んでいることが示唆された。また現在、程度に強弱はあるが、半数を明らかに上回る保護者(6割強)が、子どもに障害のない友達がいればよいと思い、一方でその実現を容易でないと考えていることが示された。

さらに本研究では、筆者の一人(渋谷)が友達関係を深めてきている知的障害(ダウン症候群)の青年の母親に面接し、母親が友達関係の大切さを認識し、障害の有無を問わず友達ができるようにと青年の幼い頃から何かと配慮と行動を重ねてきていることが確認できた。

以上の結果を踏まえ、友達関係の構築に向けた支援のあり方について、また研究上の課題について言及した。

キーワード：友達関係、知的障害者、健常者

1. 問題と目的

1. 知的障害者にとっての障害のない友達

互いに友達と思っていた関係が、様々な事情で空間、時間ないし心理的に薄れてしまったり、またあるきっかけでその関係が再び深まったり、最初は友達とは言えない存在がいつの間にか友達になっていたり、友達関係は必ずしも安定的、固定的なものではない。しかし人生の折々において、相互の信頼

に基づいて自己の思いや考え、関心事を率直に語れる存在、気軽に相談したり情報を求められる存在、話すだけで気持ちが楽になったり元気になれる存在、また常日頃何かと気にかけてくれる存在である友達がいるということは、自我の形成を含む人間の発達という点からだけでなく、生身の人間が各ライフステージにおいて安定かつ充実した生活を実現する上で大切なことである。

このような友達の存在は知的障害者にも当然必要であり、かつノーマライゼーションの実現上も大切である。関連して、同年代の友達は、その髪型や服装、話の内容、関わり方等をもってして、我が子とどう関わればよいか、何を期待すればいいかを考えたり気づいたりする機会を親にもたらしてくれる、我が子と同年代からのメッセンジャーになっている

2006年1月23日受理

† Friendships between Persons with Intellectual Disability and Persons without Disability

* Shinji SHIBUYA, Graduate School, Akita University, Akita

** Kazuo KONNO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

かもしれない。

2. 障害者と健常者の友達関係についての先行研究

我が国において、また海外でも、障害者と健常者の友達関係についての指摘や研究はきわめて少ない。

その中であって Turnbull ら (1999)¹⁾ は、我が子が障害のない子どもを友達としてもてるようにと積極的に振る舞っている4人の母親に面接をしている。そして彼女らが、自分の子ども(7歳から19歳、障害は様々)のありのままを無条件に受容した上で(Foundational theme)、友達ができるようにと4種の方略(Facilitation strategies)を用いていることを見いだした。それはすなわち①機会を見つけること(Finding opportunities、近くの通常学校に対するインクルージョンの要請、スポーツなどの地域の活動やイベントへの参加、地域的活動の自力での立ち上げ、コーチや関係者に対する理解・協力の要請、等)、②説明や強調(Making interpretation、偏見をなくして我が子を受容するように、我が子のよいところや障害のない人と変わらないところを伝える)、③積極的な調整(Making accommodation、子どもが友達関係を作れるよう、具体的な提案をもって学校や地域的活動へ訴える)である。また母親たちは友達関係が生まれ発展するようにと、我が子には特定の限られた人との出会いや関係づくりよりも、いろいろな場における広範囲の人たちとの出会いを重視していた。

一方、Orsmond ら (2004)²⁾ は、自閉症スペクトラムの10歳から21歳までの185人(青年グループ、男性が75.7%)、22歳から47歳までの50人(成人グループ、男性は62.0%)の母親に対して、本人の仲間関係、社会的・余暇的活動への参加に関する面接と質問紙調査を行っている。そして全体のほぼ半数には、同年齢のいろいろな活動をともにする互恵的・相補的な関係、すなわち友達関係と言えるものがないことを明らかにしている。仲間づくりのきっかけとなりうる社会的・余暇的活動(民間や宗教団体による余暇活動への参加、親類づきあい、近隣の人や学校・職場の友人とのつきあい、等)への参加も多くないが、その参加には本人の要因(機能的自立、社会的スキル、ひきこもりのような精神面、等)とともに環境的な要因が大きく影響し、母親自身の社会的・余暇的活動に本人を参加させているケースも少なくなかった。

一方、Geisthardt ら (2002)³⁾ は身体障害(脳性麻痺等)や知的障害、行動的障害などをもつ3歳から10歳の障害児28人を対象として家族への面接と質問紙調査、家庭の訪問観察等を行い、近所に友達や仲間がいる子どもがきわめて少ないことを明らかにした。対等とは言わないまでも仲間と言える相手がいる子どもの親は、我が子が他の子どもと会うチャンスが増えるようにと努め、教会の子どもグループやスポーツプログラムのような地域の活動に子どもを参加させたり、他児を自宅のパーティに招待したり自宅を開放したりするなど、いろいろなストラテジーを用いていた。また、自分が他児と関わる機会を多くもてば、その親も障害のある我が子を受容するだろうと考えている親もいた。とは言え多くの親は、我が子が他児と関わる機会を増やすために自分がしていることは何もないと答え、また自分の子どもに友達がいないことをやむを得ないことと見なしていた。Geisthardt らは、障害児が学校以外の家やその近所でも友達や仲間と楽しく関わるができるように、家内外の物理的環境の見直し・改善を含めて(例えば、視覚障害児が安心して楽しく遊べるよう、滑り台には頑丈な横木を、バスケットのフープにはベルをつけたりする。また遊び部屋の位置を変える)、親に専門家は積極的な支援(情報提供、助言等)を行なう必要があると強調している。

以上より、友達関係に関する海外の研究からは、障害者と健常者が友達関係を作ること、またその関係を続けることは決して容易でないこと、それらのことが実現するためには障害者の親(とりわけ母親)が重要な役割を担っているが、その一方で親にはかなりの工夫や配慮、また心理的、身体的な負担が余儀なくさせられるのが現状であること、関連して情報提供を含めて関連機関及び社会における支援体制及び支援内容の構築が求められることが、示唆される。

3. S君との出会いとかかわり

ところで筆者の一人(渋谷)は「秋田すずめの会」という地域団体に大学入学後からボランティアとして関わっている。この会は、障害のある幼児を持つ数人の母親からの相談を受けて、もう一人の筆者(今野)が1985年に発足させたものであり、「みんな、なかよく、いつまでも」をモットーとして、知的障害・自閉症・脳性麻痺等様々な障害をもつ本人

の豊かな生活づくりを目指している。

筆者の一人(渋谷)は、季節ごとの行事や音楽活動などの会の活動、また携帯電話で話したり映画を見に行ったりといった会以外の普段の活動を通して、この会のメンバーである一人のダウン症の青年(以下S君と記す)と4年間にわたり親交を深め、自然な友達関係、友達づきあいとなってきた。すなわち、しばらく会わないとどうしているかと気になる、時々一緒に気兼ねなく対等な意識で遊んだり話をする、困っているときには助けたいと思う、そのような存在である。知的な制限や社会経験の狭さから筆者(渋谷)が配慮したり援助したりすることもあるが、S君に助けられることやS君に言われて気づくことも多い。なお、S君やその母親からも筆者は友達であるという言葉が繰り返し発せられているが、現在の対等で相補的な関係に至る過程(友達関係の成立過程)をS君と筆者それぞれの立場から捉えた場合、そこに含まれる諸段階とその内容はS君と筆者で同じものではない⁴⁾。また、このような友達関係の成立には、筆者(渋谷)に関わる要因(知的障害者との数多い関わり、知的障害者についての専門的知識など)やS君に関わる要因(通常小・中学校での豊かな社会的経験、携帯電話を使えるなど知的能力が比較的高いこと、発声・発語に難があるがコミュニケーション能力も比較的高いこと、人への遠慮や気配りが十分にできること、等)も大きく、また多数関係していると考えられるが、やはり親、とりわけ母親の要因ないし影響を無視することはできない。S君の母親はこれまで、S君と筆者との友達関係の形成と維持を、陰となり日向となり、また直接間接に支えてきてくれている。S君と一緒に外出して楽しく過ごすことを重ねることも、本人と筆者に対する信頼を含めて、母親の考え方や決断・判断、また細やかな配慮があったからこそ実現できたとも言える。

4. 本研究の目的

障害者と他者、とりわけ健常者との友達関係については、実態はどのようなものであるのか、成立過程はどのようなものであるのか、成立や持続にはどのような要因が関与しているのか、また成立や持続にはどのような支援が求められるか、保護者はどのような意識をもっているのか等々、多くのことが明らかにされていない。また、保護者の役割が大きい

ことも示唆されるが、その検証も役割の詳細な解明もこれからの課題である。

そこで本研究では、作業所へ福祉就労している知的障害者の保護者たちに対する質問紙調査(研究1)と、筆者の一人(渋谷)が4年前にボランティアとして出会ったことをきっかけにこれまで親しく関わってきた本人(ダウン症の青年)の母親に対する聞き取り(研究2)を通して、知的障害者と健常者の友達関係について親がどのような意識を持ち、またその関係の形成のためにどのような行動をとっているのかを探りたい。さらに、知的障害者と健常者の友達関係の形成に向けた支援のあり方について、若干の考察を加えたい。

II. 研究1～友達関係の実態、及び友達関係についての保護者の意識～

1. 方法

(1) 対象者

秋田市内のある知的障害者通所更生施設の利用者の保護者。

(2) 質問紙調査

まず用紙の冒頭には、友達ということについて、「しばらく会わないでいるとどうしているかと気になったり会いたくなったりする。時々あるいはたまに一緒に遊んだり話をしたりする。困っているときには助けたいと思う。」など、普段一般に用いている意味で考えていただきたいとの但し書きを付した。

質問の詳細はIIの結果に記してあるが、主な内容は、障害の有無によらない同じ年頃の友達の存在、障害のない同じ年頃の友達の存在、ボランティアから友達関係への発展の可能性、障害のある人となない人が友達関係になる可能性の4つである。

(3) 質問紙調査の実施時期

平成16年12月22日から12月28日

(4) 回収法、回収率等

無記名で回答された質問紙の回収は、施設の方で実施。64名中41名回収で回収率は64%。記入者の大半は母親であり(88%, 36名)、本人の年齢は20歳代が75%(31名)、30歳代が20%(8名)、本人の性別は男が75%(31名)、女が20%(8名)、等であった。

2. 結果と考察

1) 結果

(1) 同じ年頃の友達存在

5件法(たくさん, 数人, 2・3人, 一人はいる, 一人もいない)で, 障害の有無によらず同じ年頃の友達が「本人に一人もいないと思う」の回答39%(4割)と最も多く, 「2, 3人はいると思う」が27%であった。「数人いると思う」は20%であった。一方, 障害のない同じ年頃の友達存在(3件法)については, 「いないと思う」が88%と圧倒的に多く, 「いると思う」と回答したのは2名にすぎなかった。

(2) 障害のない友達のよい影響

「障害のない同じ年頃の友達がいると思いますか」という質問に対し「イ. いると思う」と回答した2名には, 「障害のない同じ年頃の友達がいるということは, 息子, 娘にとりどういう点でよいと思うか。」と尋ねているが, その回答として, 親のついていけない話題でも同年代の友達とは通じる, 活動範囲が広がる, いろんな情報を教えてもらったりしている, というものが記されていた。

(3) 保護者の配慮や工夫

本人に障害のない同じ年頃の友達ができるようにこれまで何か配慮したり工夫したりしてきていることについて自由記述を求めたところ(表1), 特別なもしていない, 自然体で, というものもあるが, 学校入学前や学校の小学生時代などの子ども時代には「友達」ができるようにと時に強い目的意識で, また時にはさほど強くない意識ではあるが, いろいろ取り組んでいる親がいることが示唆される(例えば, 親子で近所の家にかがう, 幼稚園や通常の小学校に入れる)。一方, 中学校, 高校, 社会人となるにつれて友達を得るための配慮や工夫があまりなされないこと, それに本人の状況(しゃべりが少ない)や変化(高等部に入る)が関係すること(それだけに限定されるわけではない)が示唆される。

表1 保護者の配慮や工夫(記述例)

- * 近所の子供たちとふれ合ったり, 受け入れてくれる幼稚園に入った。
- * 小さい頃は, 町内の子供会に参加したりしました。
- * 小学生の頃までは, なるべく同じ年頃の子どもを家に連れてきて遊ばせていました。
- * 幼稚園も小学校も可能な限り健常者の集団の中に入れてるようにした。(クラスの人数分の1の配慮を期待し

て)。

- * 姉を通してのつき合いがあるので特に努力しなかった。
- * 特別なことはしなかったと思います。最初の頃は家族ぐるみ, 自然体でした。
- * 親として友達はできればいいなと思ってきましたが, 結局は本人のなりゆきにまかせ。

(4) 障害のない友達の希望

「現在, 障害のない同じ年頃の友達がいると思いますか」という質問に対して「ロ. いないと思う」と回答した人(38名)に, 「障害のない同じ年頃の友達がいてほしいか」と質問したところ(4件法)肯定的な回答は68%(26名)と7割に近く, 詳細は「そう思う」が29%(11名), 「少しはそう思う」が39%(15名)であった。一方, 「そうは思わない」が18%(7名), 「わからない」が8%(3名)等であった。

〈理由〉

次に「イ. そう思う」との回答理由を問うたところ(表2), 相互の助け合いや, 障害者本人にとってのメリット(豊かな休日, コミュニケーションの取り方, 発達, 休日の外出)になるという点, また, 人間の関係のあり方についての理念, 障害のない人にとっての好影響といったことが上げられた。「ロ. 少しはそう思う」との回答理由には, 本人にとっての好影響を期待しつつも, 障害のない人が友達になることが現実としてきわめてむずかしいだろうといった予測や諦観めいたものが含まれている。

「ハ. そうは思わない」や「ニ. わからない」を選択した理由(表3)は, 友達というよりは, 介助してもらう人の必要性や友達関係についての疑問があげられた。

表2 障害のない同じ年頃の友達希望の理由(記述例)

- * どんな障害であろうと, 同じ環境にある者だけの関わりだけではなく, 本来の社会ありのままに関わるべき, たとえ困難でも。
- * 障害について理解してくださり, 一緒に遊んだり, 買い物を楽しんだりという友達がいてくれたら, 本人もどんなにうれしいことかと思います。
- * 本人にとっては他人とのコミュニケーションをとる方法を学ぶ事ができると思います。
- * ある程度の会話, 理解力をもっているので本人の発達のためになると思う。障害のない人にとっては障害者を知りえる機会が増えると思う。
- * 休日に一緒にカラオケやプールに行っていきたいから。

表3 障害のない同じ年頃の友達希望にいたらない理由

「そうは思わない」
 *世の中が多様化し、健常者とつき合う事に特に意味があると思わない。
 *しゃべらないので気持ちが伝わらないと思います。
 *「友達」ということの意味ができていない。同じ場所で活動している「仲間」というならば別であるが、「わからない」
 *かなりのご理解を頂かないと続けていく事は大変だと思うし相手の方の負担になると考えています。
 *息子は年下の人に指導してもらっているわけですから、障害のない同じ年頃の友達というのはむしろかしいと思います。ちゃんとした何かの組織なりに所属しているボランティアの方に見てもらったほうが何かとトラブルもおこらないので親としては安心です。

(5) 地域の活動などでボランティアとして出会った人と活動の回数を重ねるうちに友達関係へと発展する可能性 (4件法)

「イ. あると思う」と回答したのは22% (9名)であり、「ロ. 少しはあると思う」と回答したのが32% (13名)であり、肯定的な回答は54% (約5割)を占めた。一方、「ハ. ないと思う」という悲観的(否定的)な回答は34% (14名、約3割)であり、「ニ. わからない」との回答は10%であった。

(6) 障害のある人とない人が友達関係になることの可能性 (5件法)

「イ. 容易ではない」が35% (14名)、「ロ. どちらかというとも容易ではない」が29% (12名)であり、合わせると64% (6割)が、障害のある人とない人が友達関係になる可能性について否定的・悲観的な考えを示している。友達関係になる可能性について肯定的な回答はほとんどなく、反面「ハ. どちらともいえない」との曖昧な回答が34% (約3割)を占めた。質問内容の設定の仕方によるのかもしれないが、先の「ボランティアが友達になる可能性」についての肯定的な回答(「少しはあると思う」を含めると約5割)と較べて、消極的な見解が出されている。

〈理由〉

「イ. 容易ではない」との回答理由として(表4)、本人の理解のむずかしさ、障害のない側が上位になるという対等な関係づくりのむずかしさ、双方の物理的条件の違い(時間的なもの、学校の違い)、障害のない人の側の傾向(現代っ子気質、優位性を捨てられない)、本人の状態が挙げられている。次に

「ロ. どちらかというとも容易ではない」との回答理由としては物理的条件、障害のない人と障害者の接点のむずかしさ、友達関係の継続のむずかしさ、障害からくるもの、障害のない人が障害者をリードする形になるのではないかなどの双方の関係性が挙げられている。「ハ. どちらともいえない」との回答理由としては、障害のある人がない人と友達になる可能性について、我が子についてはむずかしいが他の人についての可能性を考えての回答、障害のない人の側の要因(相手次第、時間的余裕のなさ、偏見を持たない、友達として受け入れる気持ち、障害のない人をどう思うか)を主たる理由としての回答が認められる。さらに「ニ. どちらかというとも容易である」の回答理由として、非障害者の意識、障害の種類によって違いが出てくるというような回答があった。

表4 障害のある人とない人が友達関係になる可能性：容易でない理由(記述例)

- *ひと口に障害と言ってもいろんな障害があるし、性格など理解するのに時間がかかりすぎる。
- *自分のこと以外見えないみたいで周りには、目もくれません。
- *障害の人は時間がありすぎ、そうでない人達は忙しすぎるような気がする。
- *もし友達になったとして、一方が結婚して、伴侶ができて、子どもができて、仕事がとても大変な時期になったとき、その友人関係は続いているでしょうか。
- *知的レベルが違うと会話が難しく対等の関係がづくりにくい。
- *知的障害の場合対等に付き合うのはむずかしいと思います。よほど障害のない人の方が心の広い人でないと上下関係になってしまうと思います。
- *友達と一言で言っても対等に付き合えるとは思えない。どちらかが上に立って行動して行くと思う。
- *関係が一方的になるような気がする。
- *障害のない人がお世話の形で付き合うと思います。
- *友達というより、面倒を見てもらう人になってしまうと思う。
- *学校時代に一緒に過ごしていないこと、又現代っ子の気質を考えてもとても難しいことだと思っています。
- *今は自分の事で精いっぱい時代、また、健常者は自分が優位という事をほんとうに、すてられないと思う。友だちになった自分、ボランティアをやっている自分に酔っている人も結構いますね。
- *一般の方が障害者を受け入れて下さる事は、困難な状況にあると思います。偏見と差別の目で見られていると感じる事が時々あります。その時を意識してしまうと、相手に対して遠慮してしまいます。友達関係よりも迷惑をかけないように、と身構えてしまいます。

2) 考察

知的障害者の親への質問紙調査により、障害者の中で同様に障害のある友達がいる人は少なく、一方障害のない友達となると僅少にすぎないことや、障害のない人（健常者）と友達関係になることの可能性について、容易でないと考える保護者が6割をこえる（「どちらかというとも容易ではない（29%）」を含む）ことが明らかにされた。

本人が小さい頃には、友達ができるようにと保護者としていろいろな配慮や工夫（例えば、近隣の子どもを我が家に誘う、親子で他の家を訪ねる）、また決断（例えば幼稚園に入れる）をしているが、その後中高生や、学校卒業後となると、友達作りへの特別な配慮や努力をするということは総じてなくなっているように思われた。このことには、友達との関係を含む人間関係について本人の自主性を重んじようとする保護者の意識の高まり、本人の加齢・ライフステージの経過に伴う保護者から本人への期待の変化（例えば、人間関係そのものよりも就労への不安や期待の高まり）、友達関係を作ることや続けることのむずかしさを痛感するネガティブな経験（例えば、本人が同年代の障害のない人から無視されたりいじめられたりするのを見聞きする、本人の行動が同年代の障害のない人に困惑や迷惑をかけているのを見聞きする。）など多くのことが関係しているだろう。

一方、本研究では、本人に障害のない同じ年頃の友達がいればいいと約7割の保護者が考え（「そう思う（29%）」「少しは思う（39%）」）、またボランティアとして出会った人が活動での出合いを重ねるうちに友達関係へと発展する可能性があるとして約5割の保護者が考えていた（「あると思う（22%）」「少しはあると思う（32%）」）。これらの考えには、本人の生活や発達に対する障害のない同年代の友達やボランティアの影響の大きさについて保護者が認識し、かつ現実としてのむずかしさを察しつつも友達関係の実現に期待を抱いていることが反映されていると考えられる。

Ⅲ. 研究2 障害者と健常者の友達関係の形成に対する母親の影響（S君の母親を事例に）

先にふれたように（Ⅰ. 問題と目的）、筆者の一人（渋谷）は大学入学後に地域的な活動（秋田すず

めの会）へボランティアとして参加したことを契機として、以後4年間S君と友好を深めることができた。すずめの会の活動として具体的には、夏の宿泊学習・成人を祝う会・クリスマス会・卒業を祝う会・音楽発表会等の年間の恒例的行事、月に2回ほど休日に行われる音楽の練習や手織り（さをり織り）、文集作成、年に3回ほど休日に行われる遊ぼう会等を行い、家族班、すなわち親たちが中心に、協同班（大学生が主力）からの協力・参画を得ながら進めてきている。ちなみに成人を祝う会や卒業を祝う会では、該当する本人のみならず学生も、本人や親から祝福される。平成16年度で本人の数は16名、うち5名が学齡児。学生は30名。本研究では、S君の母親に対する簡単な聞き取りを行い、筆者とS君の友達関係に母親がどのような役割を果たしてきているのかを確認することとする。

1. S君について

昭和59年9月4日出生。家族は5人であり、その構成は平成16年12月時点で父（46歳）、母（44歳）、S君（長男20歳）次男（16歳）、三男（15歳）である。S君には聞き取りにくいところまではいれないが、吃音がある。面とむかって話す分には、S君はジェスチャーを用いながら会話をするので相手としては意味を推測しやすいが、電話越しだとなかなか内容が伝わらない時がある。また、自動販売機で飲み物を買うことはできるが、かけ算や割り算などの数の操作や、合計が千を越える加算は困難であり、S君もそれを知ってかレストランで「お願い」と会計を他者に任せる姿が見られる。

職場や駅など常に利用している場所へはバスを利用して自力で行けるようになってきている。またバスの待ち時間など暇な時には、携帯電話を使用して友達に電話をかける姿が見られる。その他、携帯電話のインターネット機能を利用し、分からない言葉を調べたりしている。携帯電話のインターネット機能で解決できないときは、国語辞典をひき調べることがある。

①就学前

出生から現在まで病歴はないが、現在近視と乱視がある。乳幼児健診（3ヶ月健診）に続く血液検査でダウン症（トリソミー型）と診断された。1歳8ヶ月時に始歩。1歳から3歳まで週3回、小児療育センターへ外来保育。その後、3歳から私立幼稚園

に通園。1年目は母親と一緒に、2年目からは園児と一緒にバス通園。

②通常小・中学校

普通学級に在籍。4年生から図工と習字、本読みの時間だけ特殊学級へ。入学当初の3日間は母親と一緒に通学。その後は友達と通学。小学校から中学校まで特定の子ども（女子）と通学、帰宅をしていた。担任などの配慮により人前に出て発表するという機会を小・中学校に多く経験する。

放課後は、小学校2年生の冬から週1回の水泳教室へ、また小学校4年生からは週1回ピアノ教室へ通っていた。小学校3年生の頃から一緒に帰っていた児童と児童館に行くようになり、習い事以外の放課後は児童館で5時頃まで過ごしていた。そのことがきっかけでS君の母は児童館のボランティアとして活動することとなる。

S君の母親は、小学1年生の時のPTAでS君の状態（言葉は明瞭ではないが、人が好きだということ）を話している。また、何かあったらいつでも話してほしいということを周りの保護者に言っている。また、児童館においても自分の子どもが障害児だからといって特別扱わず、悪いことをしたら叱るとするような姿勢をとる。

H17年1月10日に秋田市の成人式があり、筆者（渋谷）も同伴したが、同級生から一緒に写真を撮ろうと声をかけられているというような光景が見られた。その日の夜に行われた中学校のこのころのクラス同窓会にS君も誘われていた。

③養護学校高等部

中学校卒業後、社会的自立のため知的障害養護学校高等部に入学する。学校生活において、生徒会活動には、クラス委員長として参加していた。養護学校の通学者は多種多様で障害のない人と変わらないような人もいた。S君が高等部2年生の時にすずめの会にさをり織りクラブが発足し、クラスメイトを誘って秋田大学の障害児教育研究室のプレイルームに来るようになる。始めのうちは、S君の母が送り迎えをしていたが、一緒に来ていたクラスメイトが大学への行き方やプレイルームへの行き方を覚えてから、養護学校から大学までは、バスで来るようになる。そして帰りは、S君の母が迎えに来るというかたちになった。プレイルームでの活動を通して関わった学生たちとのコミュニケーションの積み重ねも、S君の友達関係を築く力の育ちに役立ったと母

親は語っている。

④養護学校高等部卒業後

養護学校高等部卒業後、ある知的障害者通所更生施設で約一ヶ月ほどのボランティアを経て正式に採用される。知的障害者通所更生施設のクラブ活動では音楽クラブに属しており、2年目も音楽クラブに所属する。2年目ではクラブの代表となる。

2. 母親への聞き取りの結果

聞き取り（10項目）は平成16年12月10日に1時間ほど実施した。字数に制限があるので本稿では概要を以下に記したい。

(1) S君に期待する人生（①）、期待する人間像（②）、及び子育ての方針（③）。

①に対しては（a）友達に囲まれ楽しい人生を送ってほしい、（b）自分のやりたいことをやってほしい（それには努力も必要である。例えばピアノ）、②に対しては（c）他人の嫌がるようなことはしない人になってほしい、（d）常に相手の立場になって考え行動してほしいと回答している。③については②の実現と述べている。

S君の母親は、S君が他人への配慮を大切にしながら、友達を含めて豊かな人間関係の中で生きることを重視していることが示唆される。

(2) 母親自身やS君にとっての友達とはどういう人か（④）。

回答からは、母親自身が友達について確固とした考えをもち（「信頼関係の上に心から話せる人」）かつその存在を信じていること（「世の中には心から話せる人間は3人くらいはいる」）や、S君の友達についても、一般の人が考えるのと同意味で、かつ広い意味で（出会った人が友達のような気がする）捉えていることが示唆される。

(3) 友達（障害の有無によらない）ができるようにS君をサポートしていること（⑤）。

回答からは、S君が小さい頃から一貫して母親は、S君に友達ができるようにと願いつつ（小さい時から外に出していた。幼稚園の時には年令を問わず縦のつながりを大事にしていた）、一方では社会的なルールをしっかりと教えつつ（だめなことはだめときちんと叱る）、S君が同年代や異年齢の子どもたちと豊富にかかわりを持つことができるよう、またS君と仲間たちの行動をキャッチできるようにと、積極的に行動してきていることが示唆される。

(4) 障害のある人とそうでない人が友達関係になるために必要なこと (⑥).

S君の母親は障害の有無以前の大切な前提をいくつか挙げている(嫌いな人は嫌い、自分のありのままを見せ、また互いのそれを認め合うこと、心から友人関係を築こうと思うこと、相手を思いやる気持ち)。その上で、障害のある人に対しては障害の種類や程度を理解した関わりが必要であることや、先入観を持たないことを障害のない人に求めている。

(5) 筆者とS君の関わりについて

筆者とS君が友達になれた理由(⑦)について母親は、筆者がS君の話を受け止めようとする姿勢を上げた。筆者とS君の友達関係への配慮等(⑧)について母親は、友達関係が成立・継続するようにと、S君が好きなこと(映画やカラオケ)に筆者を誘ったりしているとし、またすずめの会の主宰者(今野)にも何かと相談していると述べた。筆者とS君のこれからの関係への期待(⑨)としては、今後筆者の友達がS君の友達ともなることを願い、またそうなるためのパイプ役を期待し、筆者とS君の付き合いに対する要望(⑩)としては、筆者がS君の一生の友であるよう期待し、かつそうなると信じていると述べた(一生の友でいてもらいたいし、そうだと思う.)。

3. 考察

S君の母親は、友達を求め友達にやさしくするところがS君らしいところであり、S君の生活や発達にとって友達(障害のあるなしを問わず)が大切であると信じ、S君の就学前からこれまで、幼稚園や学校、学校卒業後の職場(作業所)において、また地域においても一貫して、S君が親しく付き合いたいと思っている人と実際に関わり・親交を深められるようにと、心を配りまた様々な努力をしてきている。すなわち、S君に友達ができるように、友達が増えるように、また友達関係が深まるように、長く続くようにと、様々な機会(チャンス)を見出し、自身もまたそこに赴いて相手と親しくなろうとしている。とは言っても、余り前に出すぎたり干渉しすぎたりして逆にS君の友達関係を損なうこと(例えば、対等の関係ではなく、「面倒を見る」「面倒を見てもらう」のような上下の関係になってしまう)がないよう、気を配っているようにも思える。また母親自身、S君が親しみをおぼえている人たちと会

うこと、話すこと、親しくなることを楽しみにしていることが折に触れて感じられるが、このことは筆者を含めてS君とかかわる側の者にとって、母親からの信頼感や肯定的な気持ちを実感させ、S君に対して「ああしてやらなければならない」「こういうこともしてやらなければならない」といった教育・指導的な課題意識や責任感(負担感も)から離れて、対等かつ自然な気持ちでS君とかかわり続けることを可能としてくれているように思われる。

そして、S君の母親は、自然な形でさりげなく(例えば、S君に対して、S君を愛情をもって全体として受容しているとまわりの人に感じさせるような言動をとる.)、S君を受容することの大切さや、S君の全体(得意なところ、いいところ、弱点、苦手なところ、障害のこと)について、まわりの人に伝えている。ちなみにこれは、Iで言及したTurnbullら(1999)による(友達関係づくりのための)3つのファシリテーションストラテジーの中の「説明making interpretation」と言えよう。

S君の母親は、S君と筆者の一人(渋谷)との出会い、関係発展のきっかけとなっている地域的な活動(秋田すずめの会)の主宰者(今野和夫)に対して、つきあいの状況報告を時々したり(例えば、「日曜日二人で絵画展を見に行った」)、つきあいの新たな可能性の実現への協力を求めてきたりしているが(例えば「今度飲み屋に行くことも企画している」)、これにはS君と筆者(渋谷)、さらにはS君と他のボランティア学生とのつきあいが長く続くように、また深まるようにとの母親の願いや希望が込められていると推察される。

S君の母親への聞き取りからは、筆者を含めて、母親がS君に対して幼い頃から友達作りへの配慮と工夫、努力を一貫して続けていることが確認できた。このことは、筆者にとり負担とならない程度の筆者への感謝や配慮、S君が筆者と会うことを約束したときに確実に会えるための配慮や援助(時計や交通手段の利用に難がある年齢の頃は特に)、S君と筆者が基本的には対等な関係を構築・維持するための配慮(筆者の前でS君の苦手なところを言わない。プライドを傷つけない。)など、筆者についても数限りなくある。一方、S君の母親は「障害のある友達も、障害のない友達もたくさん作ってほしい」「友達のたくさんできる子(人)、たくさんいる子(人)、仲間から好かれる子ども(人)になっ

てほしい」という強い願い・期待を一貫して根底に持っていたからこそ、負担や苦勞と思わないで友達作りへの様々なチャレンジ・取り組みを続けてきたと言えるかもしれない。しかし、やはり一般の保護者にとり、子どもが幼いときのみならず学校卒業後までの長い期間に渡って友達作りへの取り組み・援助を行うことはかなり大変なことと言えよう。

IV. 結語

本研究では、作業所へ福祉就労している知的障害者の保護者たちに対する質問紙調査（研究1）と、筆者の一人（渋谷）が4年前にボランティアとして出会ったことをきっかけにこれまで親しく関わってきている本人（ダウン症の青年）の母親に対する聞き取り（研究2）を通して、知的障害者と健常者の友達関係について親がどのような意識をもち、またその関係の形成のためにどのような行動をとっているのか、明らかにしようとした。

地域生活の大切が指摘される一方で、様々な悪質かつ陰險な犯罪の被害者となることから障害者をどのように守っていくのか、という大きな現実的課題に直面している。その中で友達作り、特に我が子のために障害のない友達を作るべく努力することの意義と必要性は、ややもすると見失われがちである。

保護者たちが抱く、我が子と障害のない人（ボランティアを含む）との友達関係の形成の「可能性」が実現できるよう、またその実現に向けて本人がいくつかのプロセスを踏むことができるということを保護者が実感・信頼できるよう、今後、様々な支援・取り組みが求められる。例えば、学校時代においても、障害のある友達とともに障害のない友達を作るためにどのような取り組みが必要か、教師として、また学校全体としても考え実行に移す必要がある。ちなみに、養護学校の高等部において、特定高校との合同授業や行事を比較的長い期間継続させ、その中で顔見知りとなった本人同士が学校卒業後に友達として付き合っていくようなきっかけ・土台を作ることはできないだろうか。障害のない人の側がボランティアとしてではなく本人にとってもっと対等な関係で活動をともにする、重ねていける、そういう関係づくりが今後学校に期待される。さらに、保護者のみならず学校の教師にも、友達の大切さを認識してもらい、また友達関係づくりへの支援のあり

方（方法と内容）を学んでもらうことも必要かもしれない。

さらに、今日、各地で青年学級等の地域的活動が展開されつつあるが（地域格差も大きい）、障害者と健常者が対等の関係で安心して参加・運営できる多様な地域的な活動を、そのバックアップ体制も整えながら（例えばガイドヘルパーによる送迎の安全保障）、もっと充実させていく必要がある。

障害のない友達を作ること（その持続も含めて）には、もちろん本人や家族の側の要因のみならず、地域社会、学校・教師や健常児者・その保護者の側の要因も考えられるし、今後この点からの検討・考察も必要である。本研究の対象者のほとんどは、高等部は養護学校であったが、それ以前の学校歴については本研究で把握していなかった。小学校や中学校時代を通常学校で過ごすことが障害のない友達作りとどのように関係しているのか、またそれにはどのような要因が影響しているのか、今後の大きな検討課題と言えよう。

ちなみに、知的障害がある Pat Worth (1999)⁹⁾ は、健常者からみて、障害者との関係づくり（友達関係）がどうしてもむずかしいのかも考えてほしいと主張しているが、このことも、現在及びこれからの学校教育、また特殊教育から特別支援教育への転換と絡めて検討していく必要がある。

本研究は、対象者数が少なく、年代や性別、障害種別、生活の場所（基本の場所が在宅か、グループホームか、施設利用か、等）等々、多くの観点からの考察ができなかった。

さらに本研究では、友達関係について「しばらく会わないでいるとどうしているかと気になったり会いたくなったりする。時々あるいはたまに一緒に遊んだり話をしたりする。困っているときには助けたいと思う。」など、普段一般に用いている意味内容のものとしたが、友達関係の定義や基準は友達関係の研究において常に指摘される重要な課題であり¹⁰⁾、筆者らも今後さらに検討・究明していきたい。

以上、本研究に関しては多くの検討課題が残されており、その意味でパイロット的な研究とも言え、今後さらに研究を深めていきたい。

謝辞

研究に協力していただきました知的障害者通所更生施設 S 園の保護者の皆様、そして S 君とお母様

に、心から感謝を申し上げます。

引用文献

- (1) Ann P. Turnbull, Lourdes Pereira, and Martha, Blue-Banning (1999)
「Parents' Facilitation of Friendships Between Their Children With a Disability and Friends Without a Disability」
Journal of The Association for Persons with Severe Handicaps. Vol.24, No.2, 85-99
- (2) Gael I.Orsmond, Marty Wyngaarden Krauss, and Marsha Mailick Seltzer. (2004)
「Peer Relationships and Social and Recreational Activities Among Adolescents and Adults with Autism」
Journal of Autism and Developmental Disorders. Vol.34, No3, p 245-256.
- (3) Cheryl L.Geisthardt, Mary Jane Brotherson, and Christine C.Cook (2002)
「Friendships of Children with Disabilities in the Home Environment」
Education and Training in Mental Retardation and Developmental Disabilities Vol.37(3), 235-252
- (4) 渋谷真二 (2005)
「障害の有無を越えた友達関係についての研究」
秋田大学教育文化学部平成16年度卒業論文 (障害児教育選修).
- (5) Pat Worth (1999)
「Friends Make a Difference」
Journal of Leisureability, Vol.26, No.3, Summer.
- (6) Angela Novak Amado (1993)
「Friendships and Community Connections between People with and without Developmental Disabilities」
Paul H.Brookes Publishing Co.

Summary

The present research examined how the parents of persons with intellectual disability would view friendship between persons with intellectual disability and persons without disability.

A questionnaire survey was used to parents of persons with intellectual disability who worked at a sheltered institution. The results of the analysis showed that very few persons with intellectual disability had friends in general, and friends without disability in particular. The parents reported that they had made efforts to help their children to have friends when they were of school age. However, in so doing, these parents had soon noticed that it would be far from easy to do so.

In addition, one of the present authors interviewed with a mother. Her son with Down Syndrome was 20 years old. One of the present authors had had contacted with him in previous years. It was suggested that the mother had an important role in the construction of friendship between her son and one of the present authors.

This paper concludes with several suggestions to help establish friendship between persons with intellectual disability and persons without disability.

Key Words : Friendship, Person with Intellectual Disability, Person without Disability

(Received January 23, 2006)